

# 西朋報告

10

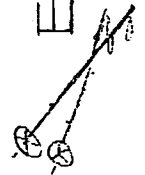
VOL .4 1956 .5



一月の八海山

才三度冬山

# 35 年 沼 八 海 山



高立西高山岳部のちに「て」て極端な山を三度冬山と云ふ。思えば中学、高校を通じて先望らしい先驅も持たず、一人のコーナをも得られなかった我々は、自らその山行を制約せざるを得なかった。登行は地道に異様又の森林帯でなく、昔の山道の行。耳三回の合宿システムは一応の設備をみるに充分であったが、それが少人数に限られ、しかも機務会費を大増運動部に置いて居る関係上、一つの時期に会の精力を傾集すると云ふ事は非常に困難であった。運ま三回の越冬期は、スノーと似たの記録に止まり三月は身近な八坂に「ワリエーション」を求めてお掛けた行。しかし才三早辰冬山を控えた我々の卓上は、なつてない程の論議が集中された。何故なら、は会費の大半を専らに有する我々に一つの時期が初めて訪れて来たのであった。精神的、肉体的に或る安定感を得て初めて羨望がひろが、て行くのである。

五月のリーダー会が實力を振舞はせて果を分散した。理趣は高かった。しかし、たとえ、それが二紀どころであつても三早辰の我々には本来過ぎた。六月のリーダー会において、隊員は八名以上で極地法を採用する事に決定した。勿論極地法は最初の試みであるので、いわゆる試行段階として国内地にも影響を与えた。北岳地帯を八海山が最後にとられた。この二つを決定する事

なく、山会北函合局と八月に集中形式による別隊隊走が十日間三夜にわたって行われた。九月、最終決定時期を控えた。八海山、は選ばれた。我々の技術的し、ベルを見るならば、氷雪技術の未熟ゆりにわかつて、猛去、ラッセルを強いられた雪山が猛台に送られていたのであるが、その絶頂算として、東雪八海山が送られたのも一理ある事であった。ともかく日頃の精進がこれほど功を奏するかと云ふ事は、なかなか興味ある問題として検討されたのである。C・I田中実、が隊長と決定し、毎日行われていたスノー合宿を中止して絶頂結集に務めた。資料は会報八号において田中利次氏の「資料より見たる積雪期八海山」によつて全合宿に添送する事に務めた。十月上旬、偵察隊が出され、主に八海山神主、山田一利氏の助言及び最も険急とされている、入つた岩峰、が偵察の主要とされた。山岳巡礼の映画「八海山」は我々に極大な印象と感念を与えたものであったが、この地方独特の「ドカ雪」は山田氏の助言によつてなお恐るべき印象を与えた。厳冬期のラッシュニアタツワは不可能であることが公然として、しからは極地法は勿論、旧々の体力、精神力の訓練は明確な事実となつて裏出された。B・Hを八海山社務所とし、C・Iを二ニロロ米附近、C・IIを一六五〇米附近と定め、全日程を十日間とした。この日程（一日一日）十日間は、該隊期を控えた我々には、ある程度を示さざるを得ないものであることは事実である。十一月の某合より毎週日曜日に準備会が向かれ、計画の進捗を見た。

(田中 実)

▲期間 十二月廿一日より昭和廿一年一月八日

▲行動報告

▲編成

第一隊	子	沢	勇(記録)	21
	林		武志(後援)	20
第二隊	田	中	実(記録)	22
	町	田	朋(後援)	22
第三隊	福	田	宏二郎(後援)	20
	佐	藤	信若(会計)	22
	鈴	木	輝天(庶務)	22
	松	田	朝天	22
	小	田	尚米	20
	米	野	弘躬	20

十二月廿一日

先延福田、鈴木、松田、林、米野の五名と野本(一、二、三、四、五)日町からバスで大崎村「ふじやさん前」下車(一、二、三、四、五)すぐ前か八海山社務所で、そこに野本介にたずねた。双葉が降って居るが積雪は全くない。いこか気勢を殺らぬに思いたが、スキーをほかずに滑るだけの予定で、たとえうべさか、森に入らぬと誓う。

三十一日一月元旦 雪

元旦は雪に閉じた。いよ／＼冬山開始だ。ラッセルを兼ねて二合五寸の荷物中絶地を剛直身小屋まで荷上。スキーは社務所に残しワカンを用意する。積雪は大崎町、里宮十種、金剛堂兼小屋一、米半と云う様に高度に比して氷河段の増加して居る。小屋までワカンを使用したが、たので一歩毎に泥が出て来るかと思つ程もぐる。昼食后三合目まで登って来たが、ワカンをつけずに福田はスカリへ廻りながらと云う長一、米もあるのを穿いたのに大差なく登すでもよかった。

大崎(ハロハロ五)——里宮(ハロハロ三〇)——金剛(ハ一、二、三、四、五)——三合目(一四、五〇)——小倉(ハ一、五、二〇)——大崎(ハ一、五、二〇)

今日の結果より見てC.I.までの距離、か計画の距離と違った様

に遠頭、冬型又は圧配園に行るとルートの確保が困難の為、バー  
を明日中に金剛小舎に移動することをす。  
後発隊、田中、佐藤、町田、小田、上野、平次は奥山にて合  
流する。

一月二日 奥山時

昨夜の日は大崎で一尺弱、BH附近で二尺位。逆雪のため重い  
ラッセルだ。一人四箇位のボツカを昨日と合せて三十五箇位上  
た計算だ。BHで少し寒い昼食を摂り、空桶の為に銚子を残して  
大崎へ下る。後発隊は事情を話し再びBHに向う。ラッセルは完  
全だのだが二合目あたりで腰バテを感してエンゴしかかった。B  
Hは水場もあり雪の吹込みも少なかった。か程出しが早く通風が悪い。  
明日はC工が建設されるので、いよいよ編隊行動に入るわけだ。  
大崎(ハロセ四五) — BH(ハマニヨ昼食) — 三三〇 — 大崎  
(ハニニ五) — 一三五〇 — BH(ハニニ五)

一月三日 奥山時 〇工建設

少しガスがあるが明るくて希望もてる天気だ。雪は明け方ま  
でちらついて新雪が一尺位積った。全買ワカンをつけストックを  
持つ。橋田は例のスカリをつけ万耳トップをやる様に見えるが、大体  
が裏してどうなることか？ 一昨日のラッセルは愚論ない。大体  
滑り補助したいに、居て遠からず滑るとプツシユだ。だから吹溜り  
を避けて歩く様なものだ。跡上仕事でビショツとまぐるが、ボツ

カ量は空くて五箇位なので特にラッセル着け出さない。プツシユの  
倒れたのが多くワカンが引っかけた。あきらめよく  
橋田のスカリは木の枝にデブされた。三合目(主峰)にきたところ  
約九〇〇米。からは直立する背は傾斜になり降位のラッセルにな  
る。登る姿勢に成れば胸以上の雪を押しわけねばならぬ。天気  
は十時頃より沢才に無意味な程の快晴に変わった。太陽は、これが  
最後かと懸せる位、ズラくと照り青一色の空はまるで初夜を覚わ  
せる。その上風が思ひので悪いこと甚しい。重い雪の重みでトップ  
に立つて曰く「死ぬ思い」の甚しんだ。カセカンド以下に成れば、  
うっかり小頃の二つも出さうな位の八ひりしたものだ。然し交代  
を短くする以外採るべき方法もない。あれこれ気がかりな、でも  
行程はさっぱりはかばらず三時になつてやつと計画の予定地であ  
る玄い田合目(ハニニ〇米)に着いた。せつかく本寒炭をづらし  
たのにと想うと面白くもないが、尾根の北側の台地をC工と決め  
折廻のブロード四人用を張り一隊の平次、林と三隊から町田の三  
人が入る。田中と三隊はBHへ下る。道高以来の巨穴を穿つて登  
り五時頃のところを四〇分だけ降った。

一月四日 奥山時 悪寒強風夕刻小雨

C工の三名は次第毎々で偵察するつもりであったが、起床と時半と

BH(ハロ六一五) — 三合目(ハロ九二〇) — 昼食(ハニニ〇  
 — 一三〇〇) — C工建設(一四二五) — 一五三〇 — B  
H(ハニニ〇)

は甚だ申渡ない。降雪がなかつたので三降は十時までに止まって来てしまつたろう。雪原は相変わらず重く、それに三人のラッセルでは交代が早すぎる。尾根は一寸やせ、又台地状となつて四方からの尾根に消える、その上を登った時、B口から登つて来た三隊から声がかつた。前方には浅草岳が南に遠くに見える、尾根は右身に曲つてゐる、左に曲つて三百米程で右に曲り一登下つた浅草岳につづいてゐる。最低コルで尾根はたつたので二本目の尾根に取付き急登にする。この尾根を辿ると一四九〇米ヒールに出るが、良く見ると浅草岳へはもう一本南側の尾根が覗いてゐる。風が強くなり時々雪塵をまき上げ、更に三本目の尾根につづり、ルートを通脱して引返すことにした。帰路は赤布を付しなから下る。

CI(一〇八四〇) — 飯櫃コル(八一三二五) — (一三三三〇) — 引返す(一三三三〇) — CI(八一五〇〇)

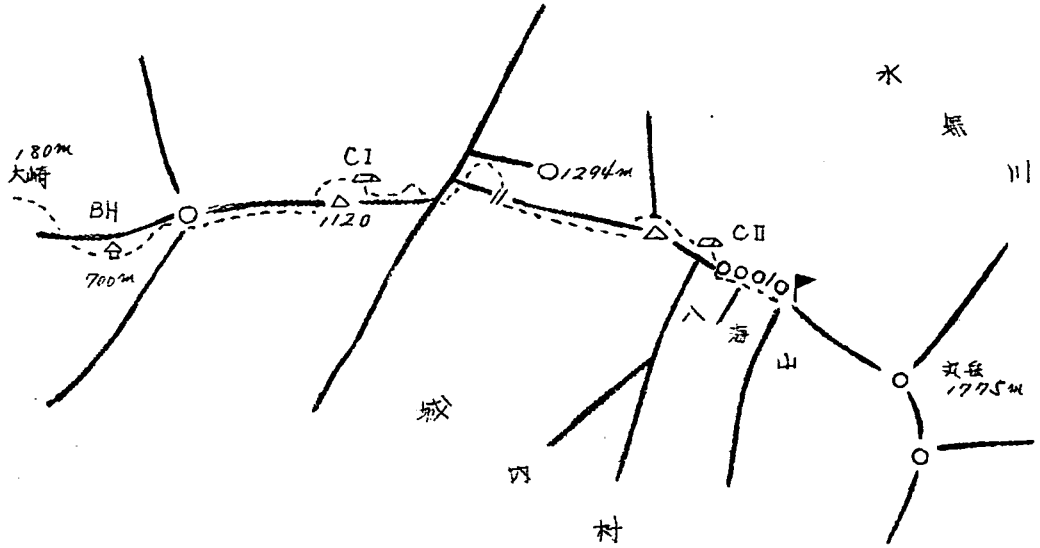
B口隊、休憩の切れた米野を急送つてCIに向う。雪は湿つてワカンには使えない。昨日辺いたラッセルの跡も、今日は冥岳に足どりも軽く正味七分でCIについでした。ナイロン四人用を増設し、雪洞を掘つて食糧を収納する。小田が穴掘りに天々のひらめきを現した。

BH(一〇八二〇) — 三合目(一〇八五〇) — CI(一〇九九五)

一月五日 小雨后晴 視界無し CI建設 **収**  
 朝食を四時半にすませ、早速ナイロン天幕を撤去する。生膜が

い風と共に雨が降りて来る嫌な陽気だ。昨日の引返し炊具がノンストップで止す。ここで小憩。小田は寝ているスユツカで「自分の穴」を作り風を避けて居る。左に登つて尾根は右に消ると左側が切れて雪荒れ出ている。や、と本営に山らしくなつた。ラッセルは相変わらずで懐かしい。としてゐると雨が寒い。目標になっている若峰は右から捲き消し尾根にも出る。少し下ると今度は六〇度位の急斜面がある。距離は短いが雪は完全な積の上まで承てしまつた。二〇米を二〇分要してや、と通過。ここで森林帯と分れた。平らな積せ尾根をしばらく行くと女人壁跡らしい所へ出る。ここで急登にする。雨が雪になつた。グツシユも少なくなつて雪も締つて来る。尾根は全く慰になつて富士山を登っている様だ。二人前か誰だか判らない位が入が着いのか直線に登ることには、すかしい。ワカンの爪が立たなくなつた。傾斜が緩くなつた。照つたり数歩前は雪荒れで切れている。浅草岳にしては早すぎる。板尾根に入ったのかも知れないが右に行くのに間違いない。履機用ストックを立てておく。右に行くにすぐ下りになる。下る者はないので迷つていると町田が首だけ雪面に嵌まっている様田考の銅像(三米位ある)を発見したので浅草岳頂上に来たこと、お蔭められた。結局予定のルート通り登つて来た。頂上に来たのは判つてもハッ峠のPIは勿論、足下の雪荒れ見えなない。雪荒れだらけでどこもスッパリ切れている様に見える。雪荒れを踏してみる。止た様である。氷寒剛を五米程寒更に下つてコルに嵌た。傾斜がわかからずシユカブラに踏く。十本松小屋は完全に埋つて居た。直ちに

# 越後八海山略図



CII連敗にかりナイロンワイパーをPII寄りに巻る。すこし東風なので入口は西にしてブロッリを高く積む。小田はスモギシ打用の筒利を掘っている。一、三隊か入り三隊はCIIへ下る。アタック態勢完了明日は網対態勢だ。夕方 風が北西に吹いてガスが窓に積れた。スベア快調、飯も快調。たまにはガンタを炸らないと喰い込まずうだ。

- CII(ロネ四〇) — 引返車(ロカニ五) — 女人怪跡(一〇、二〇、三食一〇、五〇) — 浅草坂(一一、二〇) — 今本檢CII(一一、四〇)
  - 三隊CII(一一、四五) — CII(一四、四〇)
- 鈴木はCII連敗後下山、東京に連絡をたのむ。

一月大日 橋臺悪風后ガス

## (登頂)

五時、バンケレーターが天気を覗くと絶好でもないが件々いける。何となく嵐の前とまう様な風気味を合八だ辯かな空模様だ。一隊の呼沢、林がアタックに向う。

PIIは右に巻いてI・IIのゴルに取付く。膝までのラッセルだし、ゴルへの出口はブッシュの落し穴があって胸まで落込をし、どうも送備行か一步としては嘆しい。ゴルで浅草坂に居る三隊とさよならするとやっと二人だけの気分になった。PIIまで行くだ。後隊は皆もしきり気配が低くアイゼンが心地よい。ラクダの荷の様な(ゴブは三つ)PIIIを通ぎ、下りにかかるとこれは一寸

八海山ハッ峰

I II III IV V VI VII



悪い、稜線上に雪庇が積って居る。城内側へ下つてみた。クブシ  
 ュの上にサラメ雪が乗って居る様だ。スヤの先にはボロ／＼の岩  
 が露出して居るところに氷でしさい。トラバー入を二回試みたが  
 悉く引返す。アンサイレンして今度はピッケルを杖として陸路  
 し、稜線上の雪庇を切つて、水照川側に傾いて居る雪庇を蹴落し  
 ながら下る。や、Ⅲ・Ⅳのゴルにつき、ガイルを解く。も、九時  
 に近い。積重な雪分を蹴落した。歩き出したとたんトソアの平沢  
 が雪庇を踏抜いて墜落。幸い打込んだピッケルの杖で歯ざりり  
 人にぶら下つて幸災を待たぬ間違えは本気本気まで行つたかも  
 知れない。切れ目は高さ約二米の壁になつて居た。滑つてい  
 たの、どう。さてそれからPⅣ・Ⅴは簡單にパス、PⅥからあま  
 り下らず小突處をすぎ、PⅦは右手の巾三米位のガリーを登る。  
 雪が止つたららしい割目があり吹溜りなので両までのラッセルがあ  
 り気分が悪い。すべPⅧへ続く。取付のベルグラのカンテを越え  
 右に入つたところにはピナクルがあり風が西側から吹上げるのでス  
 ノーリッジが出来てPⅧにつながつて居る。ガリ／＼登つてリッ  
 ジに跨つて雪を削りながら登るのでピッケルでは歩かず、尻は  
 冷えるし、スコップが凍しい所だ。西側とも七〇度位にスッパリ  
 切れていて震動を与えると、あっさり雪崩やうなので馬乗りにな  
 つてよろ／＼通過する。最後は少し悪い。十米七五度位の岩場だ  
 若々笹付きのの上にピート状の雪が附着し、その上に新雪が一尺程  
 ある。ホールドは無いしハーケンが利かない岩頂だからアンサイ  
 レンして雪を落しながら微妙な登り方を、ここを突破すれば



もう横上た。イ奥ハ岳しく記してある石柱が頭だけ出していた。元刻から空腹でバランス劣化を認めていたのですぐ飯にする。初めマカンパンを美味しいと思つた。何となくまり難いが水居は無用。ガスが湧き、風も吹て来た。記録家をおれそのは大天取。耳裏どとり漏途につく。PⅣ、PⅤはワンアットアタイムで降り、おとほコンテナアスでPⅢに出。ザイルを解く。登りに比べるど大部早い。PⅠで声をかけるど志高がありトラバースの中まで町田。小田が迎えに来た。CⅠに残つた石礫を除いた全員に本迎えを授けて天幕に着く。

CⅡ(ロセ一五)——奥岳(一三〇〇) 谷(一七五〇)——C

II 峠(一三二五)

〔CⅡ〕

今日は高登りながら駒岳に初めて見参。そのホリコームに驚く。アタック隊を見送つてからは、じつとして居られず、浅草堂へ。そしてPⅡへと成果如何と気がけるも、見えない。一〇時四〇分CⅠより耳病が悉化して残つた佐藤を除く三隊の着田、松田、小田が運送に来る。登頂の報に明日の撤収を打合せ、三隊は踊る。登頂を祝して炊飯は更に豪華だ。ああそれなのに鍋の中に平沢がカメラを落し、アソックのカラーフィルムはオジマン。CⅡ一同祝すべき夜をクシユンとして過す。

CⅠ(ロ八二〇)——CⅡ(一〇四〇)——一四〇五——CⅠ

(一五・〇五)

一月七日 風雪根原

〔撤収〕

この一週間で最悪の天候だ。雪が熱い程吹き荒び天幕が壊れた。冬山に来て一度佐吹かれば、雪崩が怖いと云うものだが、してみれば、肥好の撤収日和と云うべきか？ 撤収はCⅡから始まる筈だが、そのCⅡたるは六時半に飯をすませたのにもたもたして本隊は九時になってしまった。アイゼンを着けて下る。折雪が甘難い程り、シュパールは見えない。氷敷山より浅草堂へ出て、ストックの所から奥岳へ下る。雪は力々力々に積って風にとどまれないやうだ。登つて来た日と同様、雪は全然積がない。ただ下りるのならば、ストックを拾わねばならないので厄介だ。赤布のついたストックが思案と現れるのみ、こんな天気の時には着しい。あと一本、ガスが切れて随分巧に登つて来た。女人堂おとからは雪も降り、ななかり今度はずきでもやるラッセル。それからは外れると降雪で入ります。長いと思うがCⅠ、CⅡ間ももう近い。声をかけてCⅠ撤収を促す。佐藤は月が半分隠れて可憐なつたが、案外元気なので安心した。戻いので、遅付社務所まできめ。CⅠを去る。この送りまで来ると降雪は少く返つて、撤収の馬鹿化は暖気で着けた方が多いらしい。送りの時無かつたブーツシユが出て歩みにくい。BⅡ近くでは雪は半分近くに減つてしまつて居る。二合目附近では泥さえ現れ、アイゼンを脱ぐ。雪がみだりに戻つた。まるで春山の歸りの様だ。奥宮で寝として、少くも雪を落しすっきり雪の消えた道を里人の乗わしやうな目に

行 動 表		五日町	大崎	BH	C I	C II	瀬上
12. 31	→		福、鈴、松、林、米、				
1. 1		←					
1. 2		←		福、松、林、米			
		←		福、松、林、米			
		←		福、松、林、米			
1. 3					平町、林、田、平、佐、福、松、鈴、米		
1. 4	←			米			
1. 5		←		田、平、町、林、福、佐、松、小、鈴			
1. 6	←				平、林、田、西		
1. 7		←		福、松、小、佐			
1. 8	←						

迎えられて社務所に運ぶ。夜は神主山田氏も寝え、成功を祝って乾盃。ビールで盃を乾かして、社務所へ戻らば心愛環。

一月八日 雪

〔解散〕

朝、隊長の解散宣言があり平沢のみ帰郷。残り七名は積にまわったスキーを手に右打で下車。どうやら天候は本格的な氷型になつたらしい。しん／＼と降り積りゆく雪の中で尾山尾尾の暮せといた。

(平沢)

▲後 記

解散 散々期初登録、散々期カニ登という記録(山田利一氏)による。は我々の手の中に落ちた。計画は足、足元通りに進行し、一日の準備をもちする事なく、全額録事下山出来たのであるから、これに感した喜ばない。その原因はあまりにも明産であった。天候が天候に我々に幸いしてくれたのであった。極地法は最初の見込みとて、慎重を期して当ったが、それがあつたのも極地法の見本の如く展開されたのであるから全く耕の打ちどころがない。ラジオも料たす天候音動が助を頼りに行動したわけだが、通いぬれた山と、山なりいぞ知らず未知の山での動であるので、散々、何々と明日を願う気持は誠に切ないものであった。尾尾の設置、天候回等、科学術把握なくして成功など、あり得ないのであるか

入海山器具表

蒸気用具	天幕 2	No.5 (アイロニャンパ- 4人用)、No.8 (ブロードシート 4人用)
	マッルス 13	ヘアロップ 12、カボック 1
	スコップ 2	
登山用具	ザイル 3	30m
	カラビナ 5	
	ハーケン 9	
	ハンマー 2	
	拾 籠 1	
炊事用具	小 鍋 4	
	ラジューズ 4	杉本 PRIMUS、SVEA、STARMAX (耐凍器を含む)
	湿度計 2	

ウ、山に登る者 誰しも尖爪を持つたおぼはらわぬ。当初 大崎町  
 近より相当の積雪を覚悟し、双女雪のラッセルはこゝより開始と  
 されると判断し、なおドカ雪を警戒した。我々であったが、大崎町近  
 の積雪は一尺ほどであった。こゝにおいて先鋒隊 福田は足付を  
 金剛冷泉に上げる事に足跡を果たしたが、戻らぬやうな好

判断だつたと云えよう。村政ならば翌日のC.I.建設ラッセルは  
 十名で夜に大崎町余りを賣している。又、ドカ雪をみた場合、当  
 初予定した社務所、C.I.間では二日乃至三日行程ともならざるを  
 得なくなつたのではないかと考えた。しかしドカ雪を恐れる態度  
 は一概に郭路氏と、それを聞き伝えるものに大きく、一種の伝  
 説化された形容となつて着き安いから、又たりに恐れてはならな  
 い。(こゝには三、三に強てみられた事である)

荒天の後の新雪は約二尺にもかわらな降返のラッセルを強い  
 られた。この経験は今後の計画に相当影響を与える事であろう。  
 ラッセル方法の差が非常に大きく現れたが、これは経験と云う  
 より要領であつて、下午は有は研究を要する。検討会において使  
 又弱きは指摘されたが、その前に、準備会における発言不足を知  
 らねばならぬ。これは今回について云える事ではなく、常にそ  
 うなのである。アタック隊を除いては、断片的に云々される様な所  
 はないかと思ふ。しかしこの余裕は二層と我々のものとはならぬ  
 であらう。装備、食糧、会計技術に問題とするところはなかつた。  
 後記として書く様な事もない。しかしこれにおこる事なく、又  
 の山を逃げねばならぬ。ただ一年の統計である冬山であるのに、  
 会費向に異国心の着か多い事は遺憾であつた。  
 今回の山行について入海山神主、山田利一氏に並べたらぬ御親  
 助をいただいた。紙上を借りて厚く尚礼申上げる訳である。



# 気象について

松田 朝夫

## 一 雪に就いて

我々が八海山にあってそこに居た時は、すでにずっと以前（十二月十七、十八日）に降ったものである。暖冬はずしも積雪が少いといはえないが、山に入った当初は、吾等に反して雪が少なくて、地元の人も意外な面持ちであった。この地方の豪雪には我々としても一言置かねばならぬが、冬季を通じて曰く豪雪に明け暮れると言ふは誤ではない。やはり西高東低の冬型気圧のもたらす所とあらば、向う判断のつく事であろう。しかし、我々が注意せねばならぬ事は、この地方に降る雪質についてではどうか、そこに降る雪は「湿」の如く、それでいて湿度の多い雪、これは降雪時間を至らざるのしるべき現象が大まき事と意味している。我々はその本当の味を全感する事が出来なかつたが、地元の人々は「一般に五尺以上降った物は、スノーも輪縁もその為す所を知らぬ」と言っている。尚、近年元旦の積雪量は、石打取湖で

昭和二十八年	三〇センチメートル
二十九	五
三十	八〇
三十一	十五

である。

## 二 気象に就いて

念故に今冬は未だ暖冬の或を説し得ない。耳米から耳米にかけて、多くの遊積雪が成るをみたが、いづれも雪崩によるものである事も亦察りである。

我々が七日間山に在って、測定した最低温度は零下三度で、その同積雪量は約半分に減った。昨冬よりから日本上空の偏西風帯は、北北上し、所謂「台湾坊主」型、それに東支那海から台状に東に延びる気圧配置が多く、完全な冬型気圧配置を成る機会が少なかった様に思える。山行中、特に一月三日、本邦が小さな高気圧に覆われ、たわかに寒風吹降となつた事、一月五日、本州沿岸を低気圧が北上進し、東海南北の風が強く吹き流れた事などはいづれも冬山には珍らしい現象と認う。しかし、然りに至って、日本海の高気圧が東進し、顯著な大陸高気圧が本土に張り出して冬型の気圧配置を示し、上信越地方は極吹雪に見舞われたが我々はこの機会を逃ぐて避ける事が出来た。いづれにせよ今回は比較的穏やかな天候の中に成る事を成る事が出来たが、この計画が、豪雪を予想して立てたものとして、も間違いはなかつたと思ふ。

我々は、前向うラジオで得た天気図をべつとして気象を判断出来る確切刀はない。自然にはインテキはない。その理法に従って合理的に行動するならば、我々はより確かしき成果をおさめる事が出来るかも知れぬ。



# 36 富士山強化合宿

春の谷川、夏に北アと誓う対象とした合宿訓練は過去に於て多く行われてきた。

だが、それらはいづれも暖かい季節に行われたものであり、定めて雪質は悪者であった。そこで究えた技術をいさおの冬山に持って行く事は不安な事である。よって飯倉合宿の処置は当然の事となる。この趣旨に従い、アイスバーンと寒冷、そして寒風を控えた富士が選ばれた。日数と悪風の関係によって、現役・OJ会合同の合宿であったが、OJ側の参加は低調をきわめた。雨の後の為、危険極まりない状態であったが、技術の低さには二、三眼をおおべきものがあった。氷と雪(中惑)の差はいかに大きく見せつけられた。かってない収穫と感懐を得て競争合宿を断った。以下簡単な報告としたい。

- P C L 田中実、S L 福田宏三郎、佐藤信治、町田明、見里朝規、水野弘毅、山中啓作子、岩崎元子
- 現役 田辺 北村 高山、小谷野、黒沢、山岸、沢田
- 二月十八日 晴 気温五時寒下十三度
- 吉田(ニミ、四〇〇) 大石茶屋(一、三〇〇、三三〇) 佐藤小屋(八、一五〇、八四五) 古柳神社(〇、八九四五) 出巻(一、二、〇〇〇) 練習終了帰着(八、一五、〇〇〇)

田中 福田、現役入名が、吉田からは七、八時間見当であったが、意外に時間を食った。これはKの軽い凍傷手差と、たまたまみられたラッセル及び判れない疾風行動の為であろう。練習は最悪の状態と睡眠不足によって、危険極まりないものであった。報告は西高山岳印々報告書の為、ここでは割愛したい。

二月十九日 曇 ガス薄

- 気温 六時 寒下十八度、十九時 寒下十一度
- 午前 練習(一、四〇〇、一、二、三〇〇)
- 午後 練習(一、四〇〇、一、六三〇)

此頃は古柳神社と芙蓉荘の中間に落ちた。最初、練習地は大沢及び芙蓉荘上方と覚えていたが、いずれもすき返る横たアイスバーンにて、道号は場所の遠さが判別となった。絶対安全と云うのは地形と奇険によって定めるべきであったが、最良サイルのみで頼りの綱と云った具合で、危険極まりない状態の内に行われたければならなかった。七時、船津口を登って来たOJ連中によって、静かな林間の天幕に雑音を呼び起した。「おむい」 「弁当が来た」と途人にボヤいている。気温は寒下十八度で、富士の道向を如何に大きくみせてくれる。一夜に八人づの込りで、暖かい朝食をとる。九時、現役と田中、福田、水野、山中、岩崎で天幕を営む。場所は昨日と同様、お田道を約五〇〇米、吉田口の方に通った所である。お中道は大雪の身かほとんどその姿を隠し約三十度の傾斜で、ある程度のトラバースが強いられる。OJは福田、現役は田中のコーナによって練習は始められた。転倒停止

アイゼンワーク、ザイルワークは区切って行はなければならぬが、此の危険な氷ではそれが出来ぬ。ザイルをつけて転倒する者、それをザッヘルする者の一時一動が、致命創傷となる。戻返される。凍死した空気の中心に命令が響き渡る。

群衆尾根に続く斜面はきま／＼と光って、今の我々にはきれいだ。と云つた形跡が張気味である。ザッヘルする人、かばおれはこれにて、悪樹帯と氷に落ちてきた。足つゝ二人は止めた。とも情切町も深くない寒気の連続のうち、彼等は凍けられた。

午後、スキーとテワに別れて踏る氷野、山中、岩壁と氷壁を更送って行旅場所に出くわつた。残るは五人（山中、福田、佐藤、野田、奥里）再び静寂に就つて風と雪の、厚い雪で、かまじりとした空ではあるが、時々山中、河口湖が湖をみせる。氷を走つた様子もよく、その辺りの山々に降雪すらしい。二、三富士の雲障はかりは、何と敷しい季節に明け暮れ、静まり返っているのだらう。

午後の訓練もほとんど同様に行われたが、不祥、最初歩行練習中へアイゼンワーク、奥里の滑落があり、約五十米滑落の後、森林帯に歩込んで止まると云つた危険を招いた。歩行練習中の事故、敢てアンサイレンはしてゐたが、中破の雪に片けるを敢て、反響される場面であった。続いて笹蔭の槍柱、コーン二名、練習一名と云う変わった風景のうちに日は傾き、ギラ／＼と消ぎつた氷面を、影が少しづつかぼさ／＼といた。天幕をつつて五人と云う数、深層住居をのみすえて、ウマイ飯飯の仕度で惜しみなく時間を奪つ

て行った。

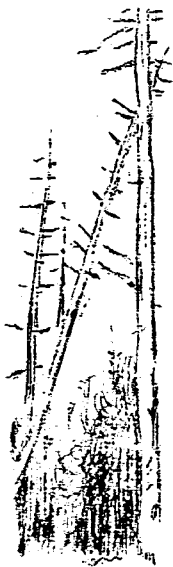
二月二十日 同宿十五米

気難 大時 溪下八度

後藤君二名を出して、八合目住居は中止された。又、練習場所の移動も考えられず、結局今日も同じ場所に出ていった。しかし風雪強く、履界は数米に過ぎられ、釘一時間半の微暗着した。履食を終つて早々に救収、下山の途についた。槍柱の氷が濡らうな足を引きずつてゆらくと下って行く。

風は、森林帯におつてこそ差程でもないが、粉雪を飛ばしてゐる。夕なて七月ともなれば、これらの深雪も消え去つて、色とりどりの人達を満載した大きなバスのエンゲンが、此の静けさを消してしまふ事だらう。緊迫した空気が、何と松に長く感じられた事だらう。振り返ると、森林限界の辺り、なげんより戻えて、相成らず取巻帯に立っていた。

(田中)



# 37 鹿島槍東尾根



P. 田中 実 小田 治 於

三月一日 雪のち曇

大町(一〇〇〇) — 深沢(一スワロ)

雪の降りしきる中を大町下町、駅の「スキー降り」には大町橋  
 雪は二米ほどのこと、しかし駅前まで行くに程か、このために  
 パスは今朝より不運となる。雪道をさめて歩くことにする。五郎太  
 のザックを背負いスキーを担いで「何となくは大きなスキー  
 ングが邪魔になってスキーを肩にのせられぬので」——二人は  
 とく／＼と雪の降る街を通り過ぎて行った。雪は次第にやんでき  
 て同前の山が見える様になった。が、鹿島槍は雪を隠している。死ぬ  
 程の氷もいさややく通りぬいた。深沢の市街は雪にうもれていた。  
 我々は火の兎やぐらの下の荒井商店の御主人の御好意に甘え今日  
 は深沢泊りとす。その夜深沢のミヨちゃんの手でアイスで晩飯  
 を食う。そのかたじけなくとも、其輩はなれども、我々が流石だ。だ、  
 寝る前には打ちに行った。雪が出ていた。

三月二日 曇時々雨 夜晴

二二時 雪下八度

深沢(ハロカ一〇) — 鹿島村野氏宅(一三二〇)

深沢のミヨちゃんに見送られては、深沢の御路を出て頃から  
 道は実に悪く不慮にブスッと腹までもぐる。二れが不規則にしか

おしはしばあるからナンナツケッウ。全くラッセルよりたちが悪  
 い。長崎の郵務が死んでから三度も風を入れた。

村野氏宅に着いて向く所に依ればこの雪は十数耳びりの大雪だ  
 そうで横浜市大の山岳部が東尾根一ノ沢頭附近で降り込められ今  
 日湖までのラッセルで下って来たそうだ。陽は落ちて鹿島の雪に  
 ラジオの音が流れ、降る様子は増々大きくナカナカと静きロマ  
 ンチックな山里は深い静寂の底へと落ち込んで行く。——グッと  
 冷え込んで来た。

三月三日 晴のち曇 夜雪

〇六三〇 雪下一一度

村野氏宅(ハロカ二〇) — 鹿島小屋(一三二〇) — 鹿島(一四〇〇) — 菅政氏宅(一四三〇)

東尾根小屋(一四三〇) — 一六二〇

昨日と打って吸った素晴らしい天気。鹿島より足は歩く人も殆ん  
 必なく、ラッセルと扱はぬ位もぐる。途中で獲のお土産を片す  
 けながら進むうちに青い青い空に白い白い雪を現した。それ  
 は鹿島槍。丸山の麓にある鹿島小屋で昼食とする。カンパンと一  
 編に食うカステラはうまうまテルモスのミルクは甘く暖く。苦しい  
 歩行の中の楽しい一時を過ごす。そこから一息で菅政氏宅に着く。  
 深沢の荒井氏の紹介なので心長く泊めてくれるという。そこから  
 空身で東尾根の取っ付きを懐かし度はオデンに舌鼓を打つ。吾輩  
 からぐずり始めた空は夕刻になって雪になった。

三月四日

雲のち雨

八〇〇

寒下二〇度

宮坂氏宅へ八〇〇——森倉へ一、三、五——A.C.へスラッ  
 昨夜の雪は約一〇種の積雪を以ての多。横須賀市の下りラッセル  
 を辿って行くもの結構時間をかゝ。石牛へ上り方から八  
 だ九番空が抜けて来て居た。太陽が顔を出し気運も上昇す  
 る。命のエキゾチックな夢が見えた。非常に暑い。シャツ二枚で歩  
 いている。横須賀市の天幕場とおぼしき所に居た。ラッセルは  
 マニで消えている。マニからマニ立って荒天寒寒と教知れぬ音  
 を起している。天狗屋敷寺が見える。我々はマニより一時間ほど先  
 の所でラッセルをして兼送する。湯が熱いと泉涌は湯の下り  
 オーヴァンシェーの紐を付くもの一苦勞する。晴天の空からは雪  
 が降り、テントからは下のマンソンが吹いて四日も蒸れる。

三月五日

天晴 寒風

五、〇〇……寒下二〇度

ニ、〇〇……寒下四度

寒くて良く眠れなかった。今日はラッセルで対うと煙しく  
 なる。口風は雪で濡れ暖かしく、喜々としてラッセルを振  
 る。しかし翌雪の上へ新雪が一杯積、場所を依って五〇程積  
 って居るピツケルをグッと差し込んでもある雪の辺りが少し入る程  
 度あり又ワカンではスリッパしやすく非常に危険なので一の足頭  
 をアイゼンを付ける。今度はアイゼンでラッセルをしなげればな  
 らず又雪も少しゆるんで来て足の裏でタコゴになり足を取られや  
 うになりこれ又非常に危険となる。二の足の頭の少し午前で引返

し、一の足頭を絶次に落ちる数多くの雪積を更物しテントに引上  
 げる。その途中で登って来る明岩野院の山荘部と青山学院の山荘  
 部の積雪の人に逢った。天候はくすんだ。この積雪を聞  
 リーダーの命に依り明日は下山と決す。

三月六日

雲のち雪

四〇〇

寒下二一度

A.C. 教区へ八、二〇〇——宮坂氏宅へ一〇〇〇〇——一、三、五——  
 一、鹿島村野氏宅へ一四〇五——一、五、五——  
 一、一〇〇

降り道は青山、明岩野院が通って来たためワカン照しても歩  
 ける。尾根の積雪のおたりに来た頃から雪が今うホラ降り出  
 して、尾根の積雪の時は、運くの方が見えなくなった。鹿島の村野と  
 人宅で休んでいる時吉田二郎氏が入って来た。カクネ里から来  
 た。餅を御馳走に。って村野氏宅を辞す。四時凍原に着き  
 寒いコタツに入れてもらう。頂上を眺めなかった。坂の頂持でフト  
 ンにもぐり込む。

三月七日

雪

寒下

寒下(七一五)バス

私本ヤヨイにて解散

小田



# 38 八ッ岳広河原沢奥壁

P. 福田三郎 小田隆彦 林武志 岡谷敏

三月三十日 豪雨

富士山(八八四〇)ー羽嶽(九一〇〇)ー広河原沢(八八四〇)ー  
一三二五)ー三〇〇(八一四〇〇)

富士見筋十分前に起った。我々は早く来たもんだ。奥壁は二十五番を越えの稜を降りて早く分ける。それから縦にしたものの側によって岩倉が深い。パスは八八四〇に出た。羽嶽で下まじ泥ハこの道をクチャクチャと歩き出す。空模様は次第に悪くなり、松林を抜けざる頃にはシヨボクと昏雨が降って来た。

霜川で竹こ。及河原沢の岩倉が一三二五。この辺りよりラッセルかなど考えていたが、雪らしいものは全然見え、空しくワカシと更なり微雪が降る。雨はいよいよ本降りとなり、壁面にガタかくる。どうやらキャンプサイトに着いたのが一四〇〇。二〇分足らずで全頂ポイントの中に入った。朝昼共に殆ど何も食べられなかったが、腹飯の旨いこと！ 雨もいっしあつた。 (小田)

三月三十一日 新雪

B.C(八十五)ールンゼ岩倉(一〇〇〇〇)ーP3側稜(一〇〇〇〇)ー急谷(十一、四五)ー十二、五〇)ーP3ガッセル(十三、四〇)ー十三、五五)ーP3(十三、四〇)ー十三、五五)ーB.C(十七、四七)

今日は広河原沢奥壁の頂上を、右側よりP3に至り、それより同一コースを引返す予定である。先ず日が暖めたのが三〇、あわてて出発する。塔はクラストして通過だ。途中まで遠くが広河原沢の石岸にあったが、中程よりスノーブリッジを越る。流、たり、沢を飛びこした。りしたので、ようやく汗ばんで来る。P3より三十分許りの右側に口割に入ると、充分使われて居る岩小倉を登る。我々は雨後の足跡を辿って、天と上げルンゼへ入った。此処でアイゼンを着け、キックスタップにてリッジに上がる。此のリッジは雨後のP3より急なもので、右側はこの稜線の裏側である。しかし怪我の功名ともえうべきか、右側よりP3へ登って、たは奥壁(主としてルンゼ)は見えないのだ。今早は雪が多いと云う八ッ岳の稜線が逆私情に火を吹く。P3の直下、即ちガッセルにてアンザイレン・福田・小田・岡谷・林のザイルパーティーにてリッジに取付く。P3は二つの部分の若よりなり、最初の部分は正面から取付き、摩滅の多い岩塊に快適にザイルを返し、々々極斜の緩慢なる所にて右寄にルートをとる。ここは竹が少々オゾイ、傾いて遠視の要った岩をコンテナアスでオゾのフェースに取付く。正面より左寄りにルートをとると岩塊が終ると直ちにP3である。P4から左側面を登り、岡谷隆安の頂上を登っている。帰路はルンゼの下降に決定。P3の裏側(P4寄り)の、ゴルジュをフィックスを置き、アプザイレンにて岩場を通過、グリセードにて高度を下げる。岩倉の三〇米の急な岳稜をピンとしてアプザイレンで下降する。

今日の積雪の結果より承るべき異変攻撃の計画を次の如く決定する。即ち南隊は今日のルンゼよりP3側を登り頂上にて、雪洞ビバークが不可能と認められるたの、二隊で運路を充分に取り登頂時刻を同一とし、日没の存P3側高が困難となった場合は行若小径へ下る。又ニルンゼのルートとしては下上の登程は不能と認められ、I・IIルンゼ中向リッゼへ取付き、平上上部にてユルンゼに下降、二隊の差となつて居る日没は左岸を突破して、そのまじ傾斜の急峻に於けるユルンゼに看果にステツフを割取頂上へと云う試みである。(稲田)

四月一日 雪

悪天候の爲停泊せざる。念願廿九日平くいう気候とから断はずぬ。テントの一日も遅延を感ぜない。明日に備えて日没と共にシユラフにもぐる。

四月二日 雪 日中一時晴

午前十時、シユラフを出たものの雪は降り続き新雪が十五センチにたつて居る。フワ／＼の雪を積しての石河床沢便登行は困難とみ、今日も停泊とする。午後には曇が差しキヤンプファイヤーと酒落こむ。又刻再、ひ雪となつたが、明日は暗でも異変と南隊登頂の予定。(関谷)

四月三日 雪後晴

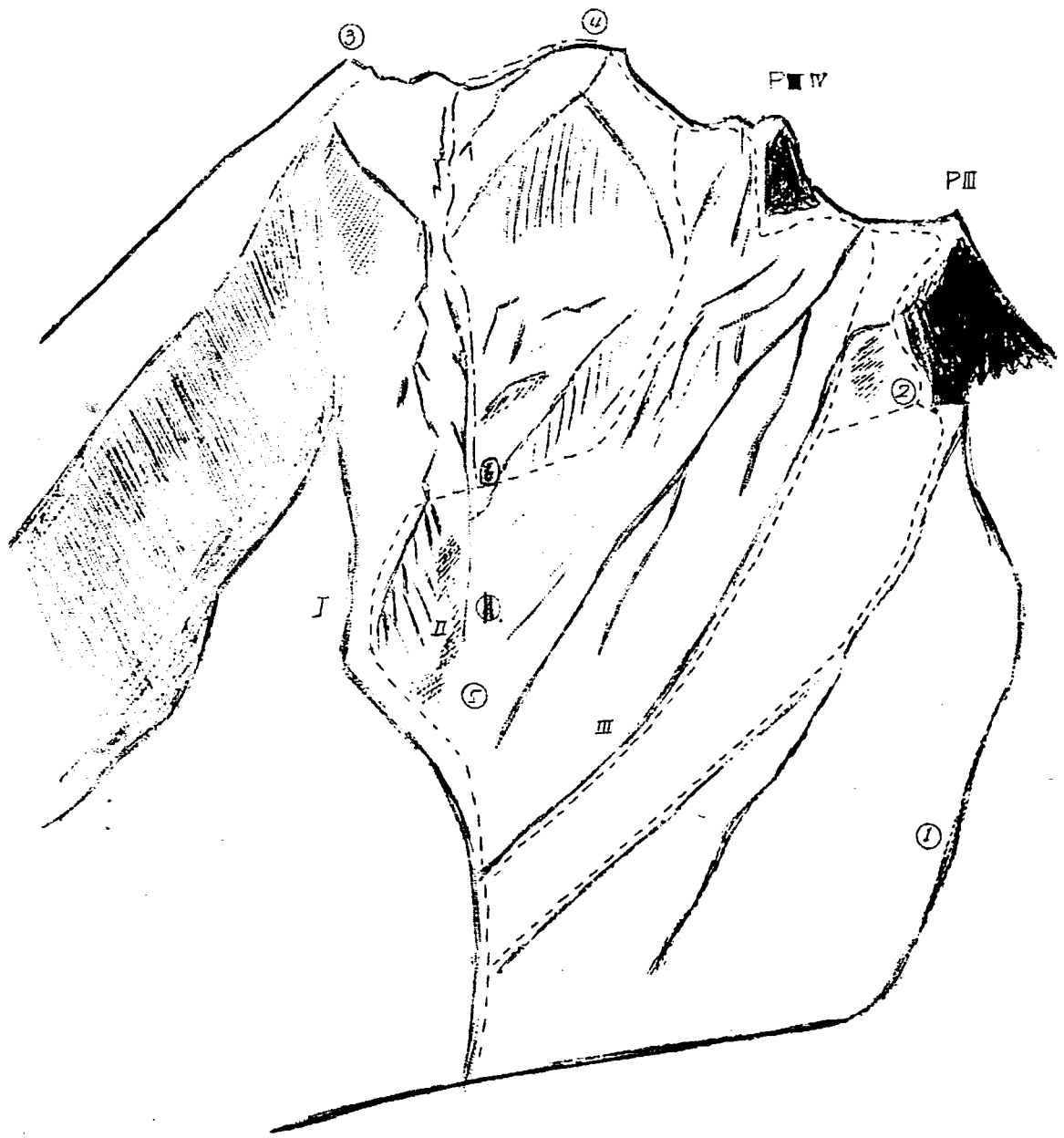
▲南隊隊 (林、関谷)

P3の別れ先日南隊のルンゼに入る。新雪の為標までのラツセルで、下は元日同様固い岩が著らす弊である。雪崩を警戒していたが別に及化はなかつた。積雪が深くてからは、新雪が二十センチあり下の雪が適当に崩りアイゼンが吸頭にさく。身迫りに登ると深で、やがて右側花や道松帯にかすく入ると先日登板を食つた所へ出た。異変隊にエールを掛けるとハツキリ返答があった。連絡は言葉ですることにする。一寸した石を投げて登り、後にはリッゲ通した。雪のかぶつた道松帯と右側花の中をかすく登り、先日に取つて非常に寒に寒れた。ザツテルで風を避けて坂にする。我々が出発する頃お日隊が霜を吹した。左側に下降しルンゼに入る。ここはゴルジュ状で、上か左いので雪崩を警戒して登る。標までのラツセルで登つたよりアイゼンがさきや安心する。少し出張つた岩の附近、かやオソイ、か何とか登り、そこから石の方へ登つた。P3の上になると、中岳附近に四人程歩いて居るのが見え、四峰は一才石に倒れて居る。四峰の下部を丘にトラバースする。一寸オゾイ、オ中からガリ！を登り、本峰頂下に出る。右側の雪崩に入る。見た目は急な坂だが別に大した事なく、アイゼンが長くさき杖柄に阿次虎岳頂上に達した。頂上から異変隊に声を掛けると、苦心しているとのこと。我々は彼等の成功を祈りつつ後算を待った。(林)

▲異変IIルンゼ (稲田、小田)

起床二時、南隊隊にビバーク用のシユラフと食糧を持たす。

阿赤陀基広河原沢奥壁 (立場山坊)



- |            |         |          |
|------------|---------|----------|
| I---1ルンゼ   | ① 石 板   | ④ 阿赤陀基頂上 |
| II---2ルンゼ  | ② 砂、テル  | ⑤ #1.    |
| III---3ルンゼ | ③ 砂利又礫天 | ⑥ #2.    |
- は予定コース

オジヤを懐に通し本義は三坪三ツ分。ライトを頼りに先日のルン  
 谷と別れる。通目、小田は思に暫えたらッセルに、目をあき足ら  
 ずルンゼの仕合へ向う。ここを渡は左牛にルンゼを連れ入れて  
 いる。通目は着々放しく下を辿る。下上の面を不問能、  
 ルートより、ルンゼの仲向リッヂに突進。定ぬこせは一言も  
 して、アレートの本端に居る。此処よりピオレを首領、その若登り  
 三十米一杯で下へ来ていた。ここよりリッヂをトラバース  
 してルンゼへ下降せんと試みるもオゾイ。五米ばかり滑田が延  
 びて来て断念。オゾイ上のバンドから下へ下れやうだ。再び  
 程度に狭いリッヂを登り、上のバンドの取付よりトラバース。若  
 や凍結した笹付の上には何うもすらと音が耐き突に恐ろしい。小田  
 原流の急流でトラバース。何となく下へ二枚の急流へ直下に達す  
 る。下2のルートは左岸を、系した水障と平行に登る以外に午  
 はない。逆肩に十種ほどかぶった新造は最速のコンテリオンで登  
 る。十五米ばかりザイルを延すもついに断念。さほどの垂直角を  
 持つ訳ではないが、ホールドが全く無く、スタンスも程度に食弱  
 である。せめてアイゼンの利く雪腹ならはと苦情を云ってもちぢす  
 らない。ルンゼは左股の登攀を後日の夢に、右側へ大きくトラバ  
 ース。左股へ直上直下に突き上げると右股へ四峰、本峰  
 向へ突き上げるルンゼとを分ける岩稜のザツテルへトラバース  
 を続ける。このザツテルより林道が、三峰を下っているのを目撃  
 エールの交換を行う。右股には然程の懸場はない。問題はこの若

稜を右股へ下るトラバースだ。一息入れて昼食。その時の新庄の  
 美味いこと。

再び登攀開始。ピオレを頼りに三米ばかり下降。ホールドが細  
 かい。オーバー牛城を脱ぎすて、吹通石腹を歩しむ。ついに  
 ルンゼ右股の中央部に滑出。ウンアットクイム、又はコンテナ  
 ヲスにて四峰の裏へ突き上げる。P.M.のバンドに林道のトレール  
 を発見。腹上へはやる心を抑えつつ、一歩／＼スアツクを切る。  
 殊、関石に感謝と夜衣の縫手を支し、高上で大いに頭突き上げる。  
 降路には、南極に三側稜をとる。(通目)

四月四日 小田坂晴

ありとある食糧を腹につめ込む。朝食と云ってよいやら昼食と  
 云ってよいやら。一応の目的も果し、テント撤収も何かのんびり  
 してしまふ。飯屑を燃し、スタコラサツサと下りにかかる。適度  
 の積雪にラツセルの要もなく、亦泥んこのぬかるみを歩くことも  
 なく、自然早足となる。本河原沢出合も一筋に通過。ハツ午への分  
 岐点で茂藪、ハツ岳は暗闇に閉ざれ見るべくもないが、深く切れ  
 こんだ立湯川は、候始目を来しませはてくる。立沢の裾路を限下  
 に小休止。身も止み、気温もかなり高くなつた稜に感ずる。折場  
 からのバスの便が悪く、富士見まで歩く。(関谷)



西朋才三年度決算報告

収入の部

前年度繰入金	2,010
入金寄附	1,200
附収	3,120
入金	1,700
	64
合計	38,174

支出の部

役員費	2,100	入理費 12,120
役員	12,620	
通信費	3,029	印刷費 2,134
印刷費	10,150	
貸付	950	
補助	790	
貸付	460	
貸付	475	
合計	31,574	

差引残高 4,600円  
減収 約 6,000円

会 員 名 簿

番号	氏名	生年	通年運動	住所及び電話番号
12	岩崎 元子	廿九	高井不PTA	杉並区大宮前二〇七一 (29) 九七五一
11	山口 雄丞	廿七	廣 大	武蔵野市吉祥寺二〇〇八 (ムサシ) 五八八七
10	成瀬 泰雄	廿八	早 大	杉並区依達三の二二五 (29) 〇三九三
9	沢 香			
8	鈴木 輝夫	廿七	武蔵工大	世田谷区北沢二の一九二
7	笹田 英次	廿七	近代建築	中野区仲町十三
6	沢 香			
5	森沢 拓治	廿七	早 大	豊谷区千駄谷一〇五五一 池七方
4	平次 勇	廿七	早 大	武蔵野市吉祥寺一九〇一
3	田中 実	廿七	中 大	杉並区愚橋二の一九〇
2	田中 将利	廿七	早 大	中野区大塚町二〇〇 (38) 〇八七五
1	改崎 正躬	廿七	廣 大	中野区本町通五の二一



LA MORAIN		(1955.12.1 - 1956.4.8)	
			( ) 村例会山行
47	上越国境縦走	1955.12.2~9	平次
48	守屋山	12.11	橋田
49	白鷺岳	12.18~30	田中(将)
50	谷川岳並風尾嶽	12.19	橋田
51	川舌山	12.25	林(春)
52	妙高スキー	12.26~28	成瀬
53	細野スキー	12.26~30	山口, 平次 (西高合宿)
54	横午岳	<sup>1556</sup> 12.30~1.1	平次
55	細野スキー	12.31~1.3	山口, 成瀬, 山中, 岩崎, 尾山.
56	穂高岳	12.31~1.5	守藤, 田中(将)
57	(35) 八海山	12.31~1.8	田中(将), 平次, 橋田, 佐藤, 鈴木, 町田, 林(春), 小田, 米野
58	茨間尾嶽	1956.1.3	林(春)
59	志願高原スキー	1.4~1.10	山口
60	石打スキー	1.8~1.10	田中(将), 橋田, 小田, 町田, 林(春), 佐藤, 松田
61	丸池スキー	1.8~1.11	芝田, 山中
62	土樽スキー	1.15	鈴木
63	石打スキー	1.22	山口, 小田, 平次, 鈴木, 山中, 佐藤, 町田, 田中(将), 橋田, 岩崎, 山口
64	富士二合目スキー	2.5	鈴木, 山中

65	蔵ミスキー	2.11~16	佐藤、森木
66	石打スキー	2.12	伊藤
67	(26) 富士強化合宿	2.18~20	田中(宛)、藤田、佐藤、町田、栗原、米野 山中、若野、野崎庄 2名
68	石打スキー	2.20	山口
69	香松荘	2.22~28	笹田、長崎
70	黒髪スキー	2.	松田
71	鯛野スキー	2.	山口
72	巻高穂谷	2.17~3.18	田中(宛)、川口
73	菅平スキー	2.29~3.4	加藤
74	(27) 花巻温泉校	3.1~7	田中(宛)、小田
75	野沢スキー	3.1~7	町田
76	岩原スキー	3.5	鈴木
77	岳湯泉スキー	3.5~6	山中
78	野沢スキー	3.8~18	町田、田中(宛)、小田、鈴木、奥山、山中 伊藤、藤田、林(武)
79	宇都宮スキー場	3.13~18	田中(宛)
80	細野スキー	3.26~30	山口
81	(28) 入ツ岳	3.30~4	藤田、小田、林(武)、奥山



# 編集後記



今冬は十数年振りの大雪と多量な雪。十二月下旬は本州地方に霜、北西気圧が停滞し大雪はなごたもの、昨、下旬は、早くもかたりの積雪を見、更に二月及び三月上旬は、ここ三ヶ年程の積雪から見ると、確かに積雪と云える。多量な雪にして積雪の数はなかつた、しかし、我々の迎えた正月の八ヶ岳山、二月の八ヶ岳山旅では、幸か不幸か、その積雪に融けることがなかつた。理かに折期の計画は遂行し得た。だがそれだけで良いだろうか。

如何なる角度から見て長谷津は、滋政のましりをまぬがぬ。富士山のスリッパ事件にともなかりである。極超急そのものについても研究の不足は明らかである。型のみを類似してるとすれば、とんでもない疑義と云わねばならぬ。根拠を流れる何物をも見出し難いからである。上に立つものか、もと傾斜に考える仕事がある。

我々の会もこれにて四年目を迎えた。西高山長部へ郡立十中山登部以米ノ創立より今年で十一年目である。ヨケヨケの歩みではあるが、我々の誇りは若さであり、情熱である。会員一人一人、か、今までの様に毎に自己の教に、こころもなことを止め、全体の内の

自己を認識することが必要だ。一人一人が会にとって、なくてはならない存在」にたつてこそ、奥の仲間と云い得る。何も彼病につく必要はなくとも内面的、精神的に受けつてはならない存在たらんとして努力することが我々の当面の課題であろう。

如何なる理由があろうとも事故を出してはならない。責任をとると云うことは、山行後の同題ではない。山行前の努力である。軌道に乗りはしたが、無意識に事を運ぶことが無きように、常に意識的行動でありたい。この銀の趣味で、軌道に乗った今年こそピンサであることを認識する要がある。

( M A S A )

西朋報告 十号

東京都中野区大和町一八〇 田中芳

都立西高OB会

## 西朋登高会

昭和廿一年五月一日発行